

保育カリキュラムと文化遺産



高 崎 毅

一

わたしの幼稚園の新任の教諭が、同窓生の研究会で、わたしの幼稚園でやっている折紙と切り紙の発表をしたら「高崎先生の幼稚園ではまだそんなことをやっているのか」といって笑われたという。

新米の園長としてわたしは大いに恐縮(?)したが、教育を学問としてやった一人としては、これを笑うような教育をした学校に大いに異議がある。

二

保育カリキュラムがいかなるものであるべきかということは深く考えれば考えるほどむつかしいことである。それは単に六領域にあ

うように保育材料と、活動とをととのえることで終るのでも始まるのでもない。

保育カリキュラムとは本質的にその基礎となる文化形態と密接なかかわりをもっていなければならない。文化とは継承と創造という二つのモチーフが力動的にからみあって生成しているものである。創造ということが特に今日はなほ重要な意味をもっていることは言うまでもないが、その創造も文化遺産の上に立ち、これと正しく対決することにおいてのみ正しくなすとげられる。

今日の文化問題が主として異質文化の接触変容(アカルチュレーション)という点から理解されるが、異質文化をただ受け入れて新しい生活の仕方が始まっただけでは文化の創造とは言いがたい。文化の荷い手である国民なり民族なりが、異質文化と対決することを通して、自己の文化遺産と対決しなおすところから文化の創造が

生まれる。

三

さらに今日の文化問題は将来の国際社会において一民族、一国民がどのような貢献をするであろうか、またすべきであるかという観点から考えられなければならない。つまりある国民文化はその普遍性ととも個性によって評価される。もちろん将来の世界文化が今日よりもっと普遍性をもち、したがって共通な形式をもつようになることは疑いを入れない。しかし単に共通性においてだけ育てられた国民はより強力な指導的國家の体制の中に組み込まれ、下請工場の性格しかもちえなくなるにちがいない。それは一種の有用性だが、そのような国が世界文化に「貢献」する国として評価され尊敬されるかどうか疑わしい。

こう考えるとわが国が将来世界文化にどのような点で貢献すべきであるかについての見通しと、計画とが、国民教育の最大の課題だと思ふ。このような見通しと計画こそ、具体的な保育カリキュラムの前提になる「目標」であり「スコープ」でなければならぬ。

これはたいへんむづかしいことだし、大いに議論がおこってほしいところだが、将来の世界と文化の本質から考えて、この国民文化

は普遍性とともに、著しく国民的特徴を具えたものとなるであろうと思われる。それは過去の文化遺産と全く無関係でありえないし、それに対する正しい対決から生まれてくると思う。

四

なお近來知られて来るところでは日本の子どもの文化的学習の過程には他と異なつた特徴があるらしい。この問題をも少しまじめにとり上げて本当に日本の幼児にふさわしい保育カリキュラムを作り上げる必要がある。

折紙、切紙が保育カリキュラムの内容として、重大な欠点をも持っていることはわたしも知らないではない。だがわたしが問題にしているのは、文化遺産を伝えて対決させることなしに輸入の保育理論で、普遍的人間と称するコスモポリタンを育てることではないのかということなのである。わたしは本当に世界に通用し、敬愛され、この国民のあるおかげで、世界文化が豊かになった、といわれるような国民を育てるために、日本の伝統的文化財、文化遺産のもつ意味を検討し、つきとめてみたいのである。

(東京神学大学教授 阿佐谷幼稚園長)